

Audio Accessory 2024 AUTUMN 194 - JAPAN



フルテックの新たなエボリューションを体験 ミュンヘン・ハイエンドで発表された 最新・最高峰モデルの実力を聴いた!



5月にミュンヘンで開催された世界最大のオーディオショウ、ミュンヘン・ハイエンドで、フルテックは従来とは一線を画す新フラグシップシリーズを披露した。世界の著名なハイエンドモデルの実力に引けを取らない、あるいはそれを超える高みを目指し、最新ノウハウを結集して徹底追求した意欲作だ。その音を、同社のリスニングルームを訪ね、角田郁雄氏がじっくりとレポートする。



最適な素材を厳選し、音の再現力を徹底追求した最新・最高峰の電源ボックス「NCF Power Vault」。非磁性ステンレス製スパイクと両面使用可能なスパイク受けを付属。日本国内での販売は未定、海外での販売価格は7,889ユーロ前後

Text by
角田郁雄
Kyo Tsunoda



フルテックビル内に常設されたリスニングルーム。試聴機材は、パワーアンプはPASS LABS「XA160.8」、プリアンプはアキュフェーズ「C-2410」、CDプレーヤーはアキュフェーズ「DP-500」、DAコンバーターはティアック「UD-701N」、スピーカーはフォーカル「Maestro Utopia」を使用



「NCF Power Vault」の内部。削り出し加工のアルミニウムシャーシに、「NCF Booster-Brace」を4個内蔵した警沢な設計。コンセントはフラグシップの「GTx-D NCF (R)」

フルテックは長年「ビュア・トランスミッション」を追求し、電源コンセント、ラインコネクタ、伝送ケーブルなどオーディオの根幹を成すパーツや製法を開発している。その経緯の中で、振動と静電気がビュアな伝送に影響を与えると考え、理想の素材開発を進め

てきた。その結果、世界が評価する特殊素材NCFの開発に成功。伝送ケーブルを支え、振動と静電気を低減するNCF Boosterシリーズは登場するなり、世界の著名なオーディオブランドが自社のリスニングルームやオーディオショウで使用するに至る。

高精度測定器やハイエンドオーディオを考えると、アナログでもデジタルでも、微弱信号を高精度に高速伝播させるためには、振動・静電気（静電容量）、ノイズを極小にする必要があり、テフロンやセラミックなど、低損失、低誘電率の基板が使われることがある。ならば当然、オーディオ環境においても、電源を含めた伝送ケーブルにも使われるべきとフルテックは考えた。しかしテフロンやセラミックでは、成形加工が難しい。そこで開発されたのが、NCFである。いまではNCF Boosterシリーズに留まらず、NCF仕様の電源関連の製品やラインコネクターまでも開発し発売。さらに、これらにふさわしい理想の導体までも開発するに至り、ハイエンドブランドでの採用も多くなった。

そして今年のミュンヘン・ハイエンドでは、フルテック集大成のフラグシップモデルを発表した。ハイエンド・パワー・デイストリビューターNCF POWER V

ULTと、ハイエンド・インターネットのProject V I・L (RCA/XLR)、ハイエンド・パワーケーブルProject V I Power Cordだ。ハイエンドオーディオは、再生環境に敏感。ならば、ラインケーブルも電源関連機器も、それ引き立てる、同社技術の粋を投入したハイエンド仕様でなければならぬ。このような考えで、これらのモデルは、静かに開発された。

●電源ボックス
NCF POWER VAULT
生演奏に肉薄する高い解像度
美しいアルミブロック切削筐体に魅せられる。私的にはパワーコソノールと呼びたくなるほど壮んだ。筐体は3ピース構造で、上部にNCF Booster・Braceを組み込み、内部にフラグシップの2連コンセントGTx・D NCF (R)を4式、IECインレットFI・09 NCF (R) 1式を設置したコンセントベースおよびプレートを配置。下部は厚なボトムケースで、電磁波吸収材を採用する。内部配線の導体はa・OCC単結晶無酸素銅(3・37sq・mm)で、インレットから各コンセントへの配線長は全て同じ。要所にαプロセス処理(超低温/特殊電解処理)も行っている。その音質は驚くほどの静寂感を



XLRインターコネクトケーブル「Project V1-L-XLR」。日本国内での販売は未定、海外での販売価格は6,993ユーロ前後



RCAインターコネクトケーブル「Project V1-L-RCA」。日本国内での販売は未定、海外での販売価格は6,814ユーロ前後



電源ケーブル「Project V1」。日本国内での販売は未定、海外での販売価格は9,980ユーロ前後



「Project V1-L」のケーブル断面図



「Project V1-L」のケーブル構造図



「Project V1」のケーブル構造図

●電源ケーブル
Project V1 Power Cord
広く深い空間とリアルな抑揚

NCF POWER VAULT
と対を成すハイエンドグレード電
源ケーブルProject V1
Power Cordは、2023
年5月ミュンヘン・ハイエンドで
発表された。注目はNCFマルチ
マテリアルハイブリッド構造の電
源プラグと、新たな導体の採用だ。
その導体は3層同心円構成で、
中心に銀コーティングのα・OC
Cを、中間層と外周層には、三菱
マテリアルのD・U・C・C・超
結晶化高純度銅(7Nクラス)を

α処理して採用し、試聴を重ね、
中心導体と外周導体は右捻り、中
間導体は左捻りとした。シールド
を徹底し、さらなる振動低減を実
現するため、メイン導体を共振減
衰素材のアウトースリプでカバ
ーし、両端にNCFのダンピング
リングを装着した。

その特徴は聴感上のS/Nを上
げ、広く深い空間描写を実現する
こと。微弱な音を浮かび上げ、解
像度を向上するが、導体の固有音
がなく、今まで感じていた高域の
雑味のような音も排除された。と
にかくダイナミックレンジが広い。
倍音を引き立て、響きの余韻は自
然な音の階調を見るよった。録音
音源の再生ではなく、生演奏のよ
うな感覚になり、音源に内包する
楽曲の抑揚をリアルに再現してく
れる。まさに、ハイエンドオーデ
イオシステムにふさわしいケーブ
ルである。

●インターコネクト
Project V1-L
弱音や倍音に優れた臨場感鮮明

今までのLine Fluxを
上回るフラグシップで、特殊な鍛
造プロセスによるNCFとリファ
インド・カーボンファイバー複合
材が特徴だ。電源ケーブル同様
に3層同心円構成の銀コーティン
グα・OCCとα・D・U・C・C・
銅線を用い、撚り方向も管理。イ

その音は電源ケーブルと同様に、
ワイドレンジで高解像度特性を極
め、弱音や倍音の再現性が高く、
演奏の臨場感を鮮明にするのが特
徴だ。とりわけ今回の4モデルを
組み合わせた音は、再生した瞬間
に録音場所の空気感が部屋に広
がり、演奏のライブ感を鮮明にする。
一枚も二枚もベールを剥いだりア
ルな音場と音像だ。一旦この音に
触れると、後戻りできなくなる。
高価ではあるが、昨夜のコンサ
トを彷彿とさせる臨場感を体験で
きることは実に驚きの体験で、音
が心に浸透してくる。導入後、買
い換える必要性を感じさせず長く
愛用できる点は、ハイエンドオー
ディオ機器と共通するところがあ
る。予算を考えながら、徐々に増
やしていきたいと思うほどだ。

フルテックは、このようにハイ
エンド・インターフェイス・モデ
ルの開発へと進化を遂げた。近々
日本でも披露され脚光を浴びるこ
とであろう。ぜひ一度、この姿と
音を体験してみたい。

その音は電源ケーブルと同様に、
ワイドレンジで高解像度特性を極
め、弱音や倍音の再現性が高く、
演奏の臨場感を鮮明にするのが特
徴だ。とりわけ今回の4モデルを
組み合わせた音は、再生した瞬間
に録音場所の空気感が部屋に広
がり、演奏のライブ感を鮮明にする。
一枚も二枚もベールを剥いだりア
ルな音場と音像だ。一旦この音に
触れると、後戻りできなくなる。
高価ではあるが、昨夜のコンサ
トを彷彿とさせる臨場感を体験で
きることは実に驚きの体験で、音
が心に浸透してくる。導入後、買
い換える必要性を感じさせず長く
愛用できる点は、ハイエンドオー
ディオ機器と共通するところがあ
る。予算を考えながら、徐々に増
やしていきたいと思うほどだ。

フルテックは、このようにハイ
エンド・インターフェイス・モデ
ルの開発へと進化を遂げた。近々
日本でも披露され脚光を浴びるこ
とであろう。ぜひ一度、この姿と
音を体験してみたい。

フルテックは、このようにハイ
エンド・インターフェイス・モデ
ルの開発へと進化を遂げた。近々
日本でも披露され脚光を浴びるこ
とであろう。ぜひ一度、この姿と
音を体験してみたい。

フルテックは、このようにハイ
エンド・インターフェイス・モデ
ルの開発へと進化を遂げた。近々
日本でも披露され脚光を浴びるこ
とであろう。ぜひ一度、この姿と
音を体験してみたい。